

公害・環境問題の現在

畑 明郎

本特集は、2022年11月27日に開催された日本科学者会議第24回総合学術研究集会B6分科会報告をもとに作成された。同分科会の主題は、「公害・環境問題の現在」であり、1960年代に発生したイタイイタイ病、熊本水俣病、新潟水俣病、カネミ油症、大気汚染などの公害問題の現在を検証するとともに、建設残土問題、環境アセスメント、自然保護、香害などの新たな環境問題を検討した。以下、6本の論文と4本のコラムを紹介する。

イタイイタイ病裁判は、イタイイタイ病、水俣病、新潟水俣病、四日市ぜんそくの4大公害裁判の先頭をきって、1971年に被害者原告勝訴判決を勝ち取り、1972年の控訴審で原告勝訴判決が確定した。畑論文は、1972年の裁判勝訴後に締結された公害防止協定に基づく神岡鉱山立入調査によりカドミウムの発生源対策を推進した50年の歴史を紹介する。

水俣病の公式確認から熊本で67年、新潟で58年が経過する。熊本も新潟もそれぞれの第一次訴訟でチッソ(株)と昭和電工(株)の加害責任が確定し、その後の交渉でどちらも1973年に患者団体と補償協定が結ばれた。未認定患者のために1995年と2009年の政治的解決で救済がはかられた。しかし、その救済から外れた住民の患者認定を求める裁判がいまも続く。萩野論文は、水俣病の現状を紹介する。

木村論文は、1980年代から約40年間にわたり、光化学オキシダント(Ox)汚染状況に化石燃料使用が及ぼしてきた影響を検討する。また、気管支ぜんそく・川崎病等の免疫系疾患とOx汚染度との相関を検討するとともに、ごみ焼却施設や幹線道路など一次汚染

源の周辺地域におけるOx汚染と健康被害の地域偏在性を複数事例で分析し、すべてに共通する傾向について考察する。

2021年7月3日の熱海土石流事故で、建設残土問題が改めてクローズアップされた。筆者は、2006年以降、京都府、滋賀県、三重県などの残土問題に直接関わった。また、北海道新幹線や北陸新幹線延伸工事で有害物質を含むトンネル残土が出ており、リニア中央新幹線工事では大量の建設残土が発生する。畑論文は、残土問題を紹介するとともに自治体の土砂条例と法規制の課題について検討する。

三重県伊賀市の優良農地で農地の回復工事が行われているが、掘削跡地を埋めるとの名目で膨大な残土が持ち込まれる盛土工事を三重県が合法と認めている。杉本論文は、残土処分、いわゆる土捨て行為と有効利用との境界線問題を考える。

横畑論文は、富山市内の里山の整備に関する住民訴訟や立山連峰の高山帯の園地整備、絶滅危惧種の生息に重大な影響を及ぼす林道整備計画などの事例を通じて、行政と自然保護団体の関係の変化について紹介する。

津田のひろばは、「水俣病に学ぶ福島甲状腺がんの因果関係」を、藤原のひろばは、「日本・台湾におけるカネミ油症事件とPCB、ダイオキシン汚染」を、中川のコラムは、「鹿児島県馬毛島環境アセスの問題点」を、粟生田コラムは、「香害」という新たな環境問題を紹介する。

本特集が、歴史的公害・環境問題が未解決であるうえに、新たな公害・環境問題が生み出されている現状を理解する一助となれば幸いである。

(はた・あきお:元大阪市立大学, 環境政策)